

## エルニーニョ監視速報 ( No. 178 )

太平洋赤道域の海水温等の 2007 年 6 月の状況、及びエルニーニョ監視海域(北緯 5 度~南緯 5 度、西経 150 度~西経 90 度)の海面水温の今後の見通し(2007 年 7 月~2008 年 1 月)は、以下の通りである。

- 太平洋赤道域の海面水温は、東部で顕著な負偏差、西部で顕著な正偏差だった。海洋表層(海面から深度数百 m までの領域)の水温では、中部から東部にかけて顕著な負偏差が見られた。中部の大気下層では東風偏差が持続した。これらの状態は、ラニーニャ現象時の特徴を示している。
- エルニーニョ監視海域の海面水温は、予測期間中、基準値より低い値で推移すると予測される。ラニーニャ現象は冬まで続く可能性が高い。

### 【解説】

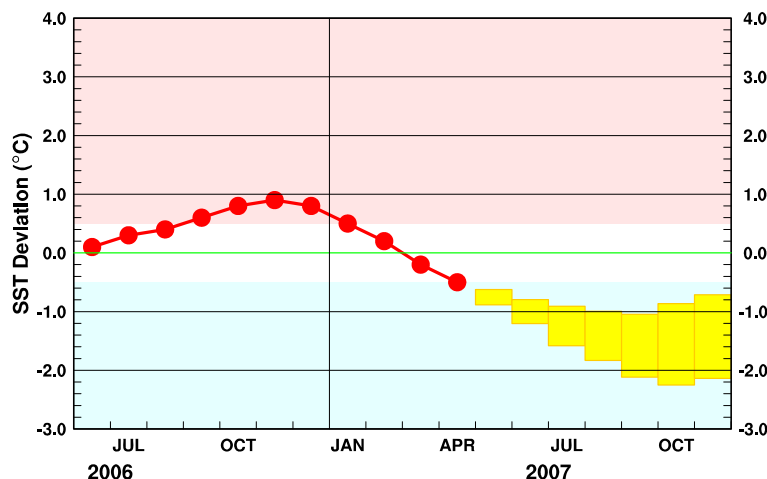
6 月のエルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差は  $-0.6^{\circ}\text{C}$  だった。4 月の 5 か月移動平均値は  $-0.5^{\circ}\text{C}$  だった(図 1、表)。6 月の太平洋赤道域の海面水温は、東部で顕著な負偏差、西部で顕著な正偏差だった(図 2、図 4)。海洋表層の水温では、中部から東部にかけて顕著な負偏差が見られた(図 3)。6 月の日付変更線付近の対流活動は平年より不活発で、中部太平洋赤道域の東西風は上層で西風偏差、下層で東風偏差だった(図 7)。海洋と大気のこれらの状態は、ラニーニャ現象時の特徴を示している。

5 月に西部に見られた海洋表層の水温の正偏差は、6 月上旬にかけて中部まで進んだが、その後大気下層の東風偏差によって弱められた。6 月中旬以降は中部から東部にかけて東風偏差が見られ、特に中部で表層水温の負偏差を強めた(図 5、図 8)。こうした状況から、今後しばらくは東部の海面水温の負偏差を維持しやすい状態が続くと考えられる。

エルニーニョ予測モデルは、エルニーニョ監視海域の海面水温が、予測期間中、基準値より低い値で推移すると予測している(図 9)。

以上のことから、エルニーニョ監視海域の海面水温は、予測期間中、基準値より低い値で推移すると予測される。ラニーニャ現象は冬まで続く可能性が高い。

エルニーニョ予測モデルによるエルニーニョ監視海域の海面水温予測(5 か月移動平均)



この図は、エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差の 5 か月移動平均値の 4 月までの推移(折れ線グラフ)とエルニーニョ予測モデルから得られたその後の予測(ボックス)を示している。各月のボックスは、海面水温の基準値との差の 5 か月移動平均値が 70%の確率で入る範囲を示す。(基準値はその年の前年までの 30 年間の各月の平均値)

## 【監視・予測資料】

### 2007年6月における赤道域の海洋と大気の状態

#### 1. エルニーニョ監視指数(表、図1)

- エルニーニョ監視海域(北緯5度~南緯5度、西経150度~西経90度)の6月の海面水温の基準値(前年までの30年間の平均値)との差は $-0.6^{\circ}\text{C}$ だった。4月の海面水温の基準値との差の5か月移動平均値は $-0.5^{\circ}\text{C}$ だった(表、図1)。
- 6月の南方振動指数は $+0.5$ だった(表、図1)。

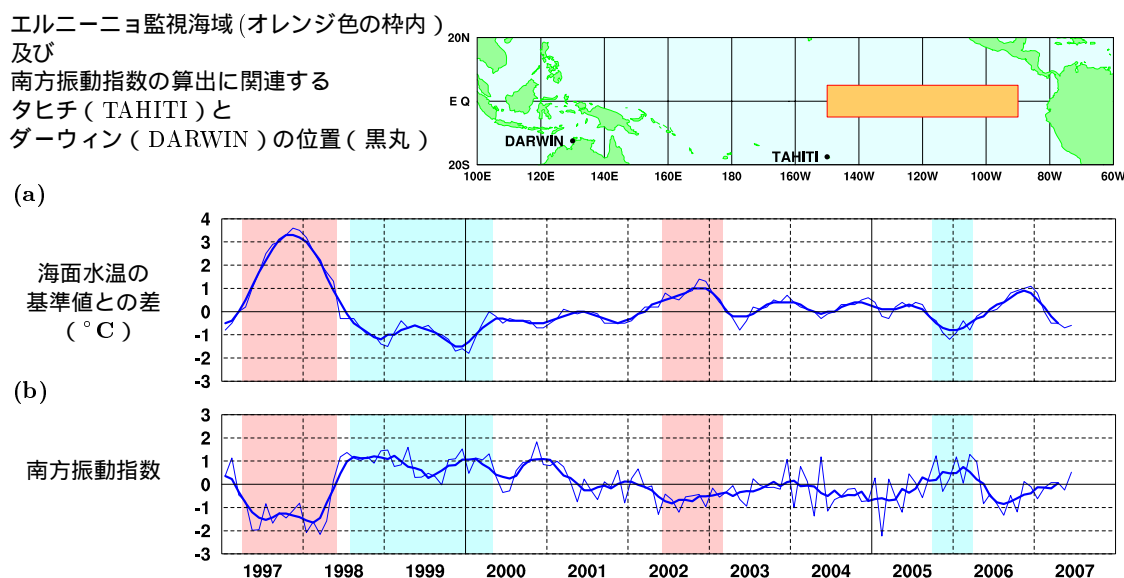


図1 エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差(°C)(a)と南方振動指数(b)の推移(1997年1月~2007年6月)。折線は月平均値、滑らかな太線は5か月移動平均値を示す(海面水温の基準値はその年の前年までの30年間の各月の平均値、南方振動指数の年平均値は1971~2000年の30年平均値)。赤色の陰影はエルニーニョ現象の発生期間を、青色の陰影はラニーニャ現象の発生期間を示している。

表 エルニーニョ監視指数

	2006年						2007年					
	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月
月平均海面水温(°C)	25.8	25.5	25.8	25.9	26.1	26.4	26.5	26.4	26.7	26.9	26.4	25.9
基準値との差(°C)	+0.1	+0.4	+0.8	+0.9	+1.0	+1.1	+0.8	0.0	-0.5	-0.5	-0.7	-0.6
5か月移動平均(°C)	+0.3	+0.4	<u>+0.6</u>	<u>+0.8</u>	<u>+0.9</u>	<u>+0.8</u>	<u>+0.5</u>	+0.2	-0.2	-0.5		
南方振動指数	-0.8	-1.3	-0.5	-1.2	+0.1	-0.1	-0.6	-0.1	+0.1	+0.1	-0.2	+0.5

5か月移動平均値の下線部は $+0.5^{\circ}\text{C}$ 以上となった月を、斜字体は $-0.5^{\circ}\text{C}$ 以下となった月を示す。

海面水温の最新月は速報値である。南方振動指数の!印は速報値であることを示す。

エルニーニョ/ラニーニャ現象: 気象庁では、エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差の5か月移動平均値が6か月以上続けて $+0.5^{\circ}\text{C}$ 以上となった場合をエルニーニョ現象、6か月以上続けて $-0.5^{\circ}\text{C}$ 以下となった場合をラニーニャ現象としている。なお、本監視速報では、上記の5か月移動平均値が $+0.5^{\circ}\text{C}$ 以上となった場合に「エルニーニョ現象が発生」、 $-0.5^{\circ}\text{C}$ 以下となった場合に「ラニーニャ現象が発生」と表現する。  
南方振動指数: タヒチとダーウィンの地上気圧の差を指数化したもので、貿易風の強さの目安の一つであり、正(負)の値は貿易風が強い(弱い)ことを表している。

## 2. 海面水温 ( 図 2、図 4 )

東部で負偏差、西部で正偏差が顕著

- 6月の太平洋赤道域の海面水温は、西経130度以東で平年より $0.5^{\circ}\text{C}$ 以上低く、西経105度以東では平年より $1^{\circ}\text{C}$ 以上低かった。一方、東経140度から東経170度にかけては $+0.5^{\circ}\text{C}$ 以上の正偏差が見られた ( 図 2 )。
- 太平洋の赤道に沿った海面水温平年偏差の経度 - 時間断面図によると、5月末に西経135度以東で見られた $-0.5^{\circ}\text{C}$ 以下の負偏差は、6月下旬には西経120度以東で見られた。また、5月末に西経105度以東で見られた $-1^{\circ}\text{C}$ 以下の負偏差は、6月下旬には西経110度以東で見られた。一方、5月末に東経145度から日付変更線にかけて見られた $+0.5^{\circ}\text{C}$ 以上の正偏差は、6月下旬には東経140度から東経165度にかけて見られた ( 図 4 )。
- インド洋赤道域の海面水温は、東経50度から東経95度にかけて平年より $0.5^{\circ}\text{C}$ 以上高かった ( 図 2 )。

## 3. 表層水温 ( 図 3、図 5 )

中部から東部にかけて負偏差が顕著

- 6月の太平洋の赤道に沿った表層 ( 海面から深度数百 m までの領域 ) 水温は、西経160度から西経80度にかけての海面から深度150mで平年より $1^{\circ}\text{C}$ 以上低かった。西経130度から西経80度にかけての深度20mから120mでは $-2^{\circ}\text{C}$ 以下の負偏差が見られた。一方、東経140度から東経150度にかけての深度80mから200mでは $+1^{\circ}\text{C}$ 以上の正偏差が見られた ( 図 3 )。
- 太平洋の赤道に沿った海面から深度260mまでの平均水温平年偏差の経度 - 時間断面図によると、5月末に西経130度から西経85度にかけて見られた $-1^{\circ}\text{C}$ 以下の負偏差は6月中旬に消失し、6月下旬には西経165度から西経135度にかけて $-1^{\circ}\text{C}$ 以下の負偏差が現われた。一方、5月下旬に西経175度以西で見られた $+0.5^{\circ}\text{C}$ 以上の正偏差は、西に後退し6月下旬には東経155度以西で見られた ( 図 5 )。

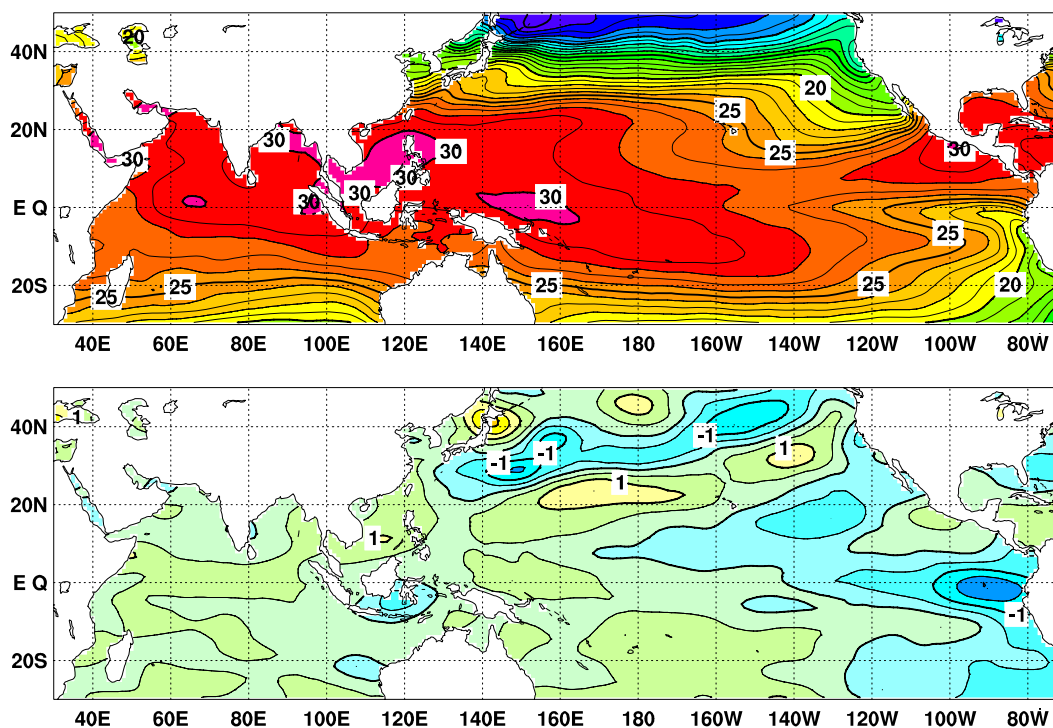


図 2 2007 年 6 月の海面水温図 ( 上 ) 及び平年偏差図 ( 下 )。海面水温図の太線は  $5^{\circ}\text{C}$  毎、細線は  $1^{\circ}\text{C}$  毎の、平年偏差図の太線は  $1^{\circ}\text{C}$  毎、細線は  $0.5^{\circ}\text{C}$  毎の等値線を示す ( 平年値は 1971 ~ 2000 年の 30 年平均値 )。

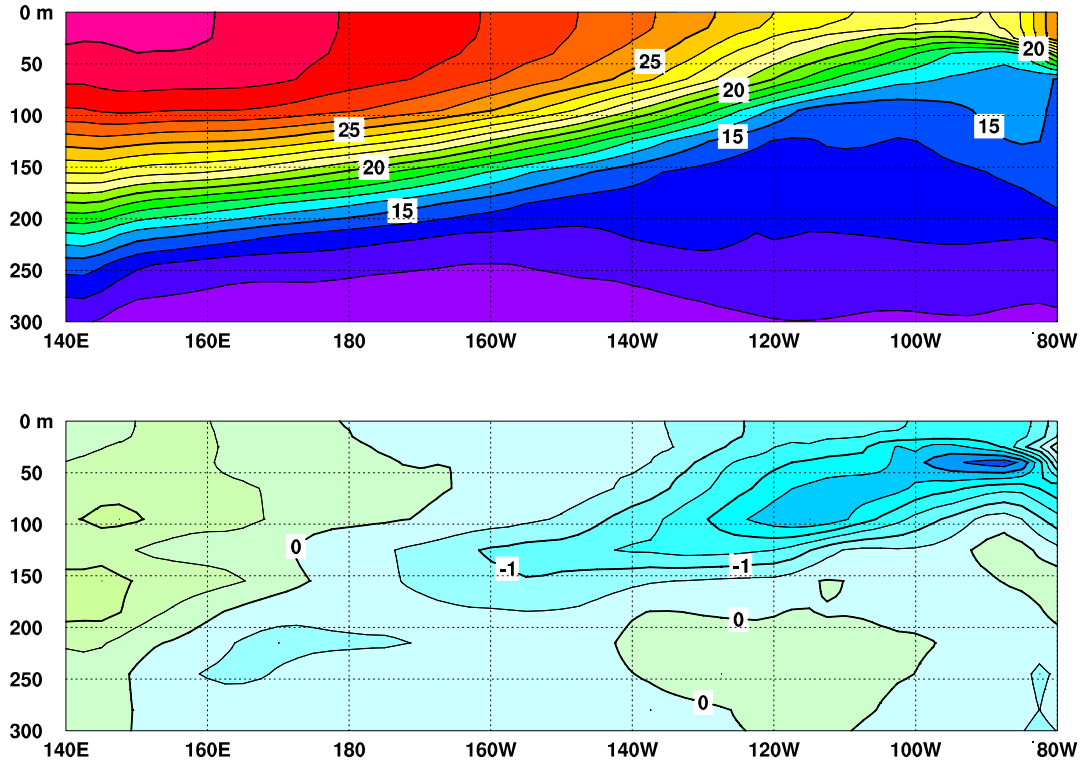


図3 2007年6月の太平洋の赤道に沿った水温(上)及び平年偏差(下)の断面図(海洋データ同化システムによる)。上図の等値線間隔は $1^{\circ}\text{C}$ 、下図の等値線間隔は $0.5^{\circ}\text{C}$ (平年値は1987~2006年の20年平均値)。

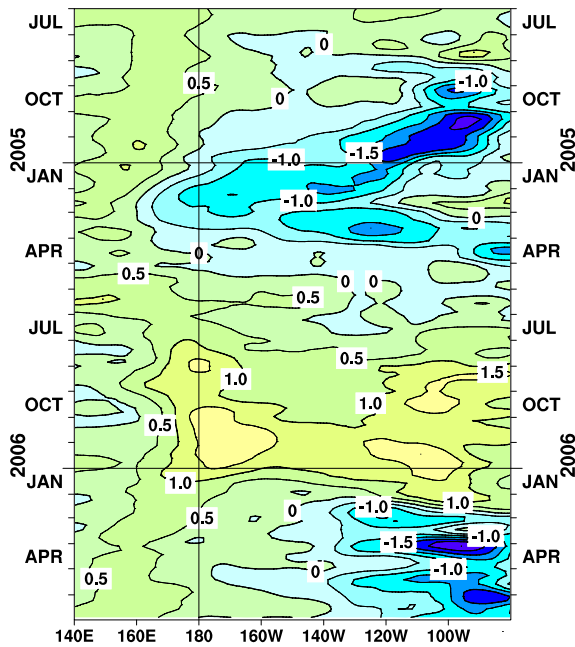


図4 太平洋の赤道に沿った海面水温平年偏差の経度-時間断面図。等値線の間隔は $0.5^{\circ}\text{C}$ (平年値は1971~2000年の30年平均値)。

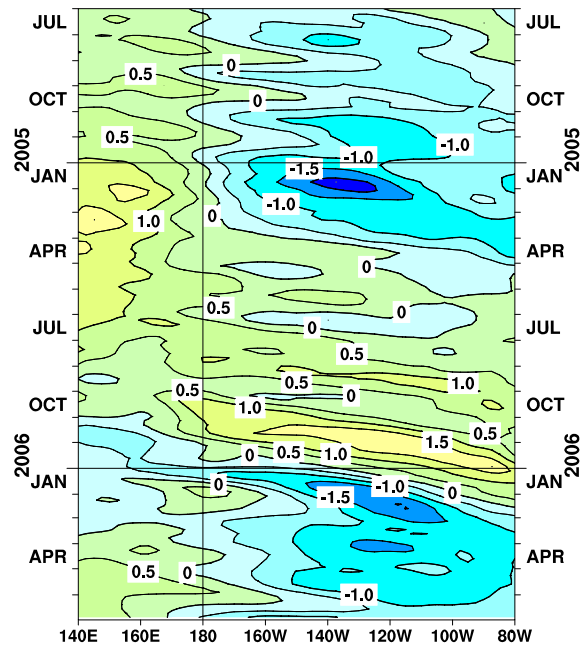


図5 太平洋の赤道に沿った海面から深度260mまでの平均水温平年偏差の経度-時間断面図(海洋データ同化システムによる)。等値線の間隔は $0.5^{\circ}\text{C}$ (平年値は1987~2006年の20年平均値)。

#### 4. 大気 ( 図 6 ~ 図 8 )

インドネシア付近で対流活発、中部太平洋赤道域の下層で東風偏差

- 6月の太平洋赤道域の対流活動は、東経105度から東経120度にかけて活発、東経135度から西経170度にかけて不活発だった(図6)
- 6月の日付変更線付近のOLR指数は不活発を示し、中部太平洋の赤道東西風指数は、大気の上層では西風偏差、下層では東風偏差を示していた(図7)
- 6月の赤道季節内振動の対流活動の活発な位相は、上旬から中旬にかけて強まりながらインド洋を東進し、その後太平洋西部を東進しながらやや弱まった。季節内振動の位相に対応して、上旬から中旬にかけて西部太平洋赤道域で東風偏差が見られ、中旬から下旬にかけて中部と東部で東風偏差が見られた(図8)

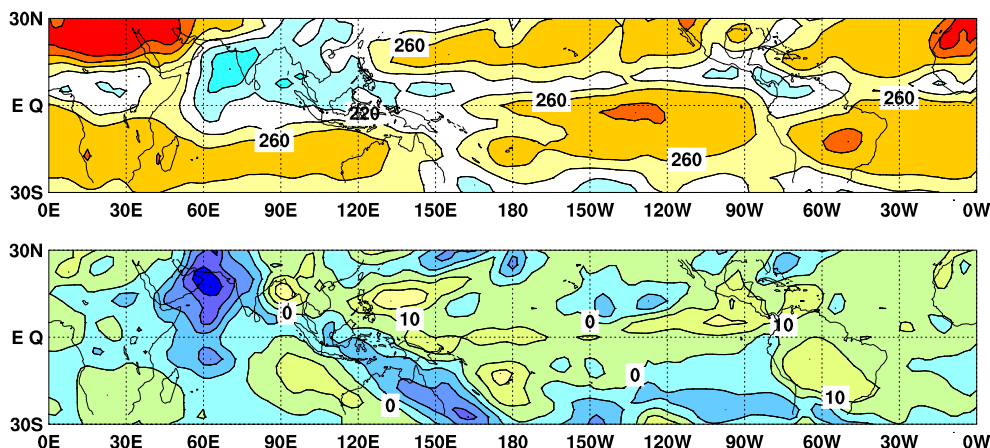


図 6 2007 年 6 月の外向き長波放射量 (OLR) (上) 及び年偏差 (下) の分布図。OLR の値が小さいほど、対流活動が活発であることを示す。上図は  $20\text{W}/\text{m}^2$  毎、下図は  $10\text{W}/\text{m}^2$  毎に等値線を描いている ( 平年値は 1979 ~ 2004 年の 26 年平均値 )。OLR データは米国海洋大気庁 ( NOAA ) から提供されたものである。

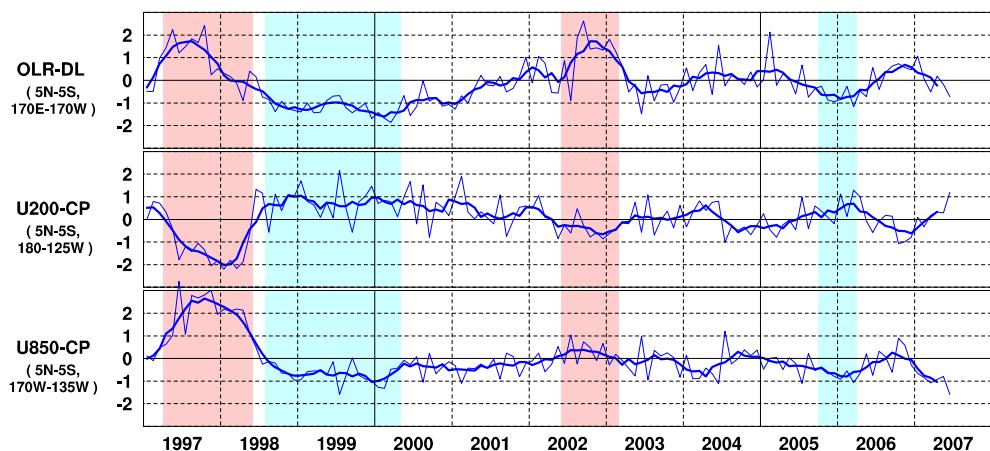


図 7 日付変更線付近の OLR 指数 ( OLR-DL )、対流圏上層 ( 200hPa ) の赤道東西風指数 ( U200-CP )、対流圏下層 ( 850hPa ) の赤道東西風指数 ( U850-CP ) の時系列 ( 上から順に )。折線は月平均値、滑らかな太線は 5 か月移動平均値を示す ( 平年値は 1979 ~ 2004 年の 26 年平均値 )、赤色の陰影はエルニーニョ現象の発生期間を、青色の陰影はラニーニャ現象の発生期間を示している。

赤道季節内振動：熱帯大気に見られる 30 ~ 60 日程度の周期の振動。対流活動の活発な領域が東進するのにあわせて東西風の変化も東に移動する。

OLR 指数：OLR から導いた上層雲量の指標の一つ。正 ( 負 ) の値は上層雲量が平年より多い ( 少ない ) 状態を示す。

赤道東西風指数：赤道付近の東西循環の指標の一つ。正 ( 負 ) の値は西風 ( 東風 ) 偏差であることを示す。

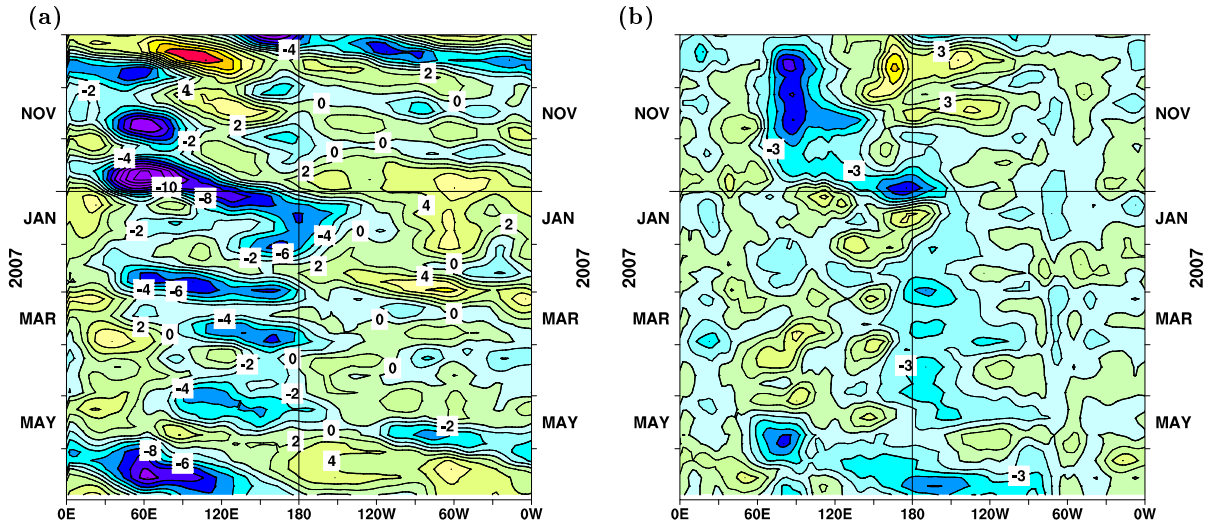


図8 赤道付近における対流圏上層(200hPa)の速度ポテンシャルの年平均偏差(a)及び対流圏下層(850hPa)の東西風速の年平均偏差(b)の経度-時間断面図。等値線の間隔は(a)が $2 \times 10^6 \text{ m}^2/\text{s}$ 、(b)が $1.5 \text{ m/s}$ (両者の年平均値は1979年~2004年の26年平均値で、JRA-25長期再解析データを用いて算出)

### エルニーニョ予測モデルによる予測結果(2007年7月~2008年1月)

- エルニーニョ監視海域の海面水温は、予測期間中、基準値より低い値で推移すると予測している(図9)

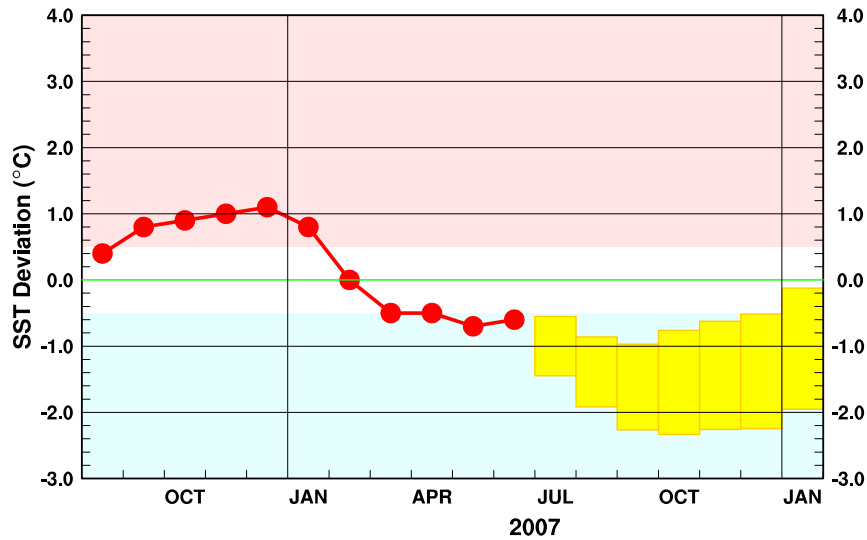


図9 エルニーニョ予測モデルによるエルニーニョ監視海域の海面水温予測。エルニーニョ監視海域の海面水温の基準値との差の先月までの推移(折れ線グラフ)と今後の予測(ボックス)を示す。各月のボックスは、海面水温の基準値との差が70%の確率で入る範囲を示す。(基準値はその年の前年までの30年間の各月の平均値)

エルニーニョ現象などの情報は気象庁ホームページでもご覧になれます。  
(<http://www.data.jma.go.jp/gmd/cpd/elnino/index.html>)

来月の発表は、8月10日14時の予定です。  
内容に関する問い合わせ先：気候情報課  
(電話 03-3212-8341 内線 5134、5135)